

登廊 重要文化財

この素晴らしい木造の屋根付きの階段は、長谷寺の本堂に至る主たる順路となっている。1039年、現在の奈良市にある春日大社の宮司であった中臣信清が、自分の息子が病から回復したことへの感謝の印として、この階段を建設した。

この階段の下段と中段は、1889年に再建されたもので、吊り灯籠が吊るされている。最初の1段目のところにある柱に取り付けられた2つの銘板は、仏教と神道の両方を顕彰している。世俗を象徴する下段と、聖なる世界を象徴する中段を結ぶ小さな橋を越えると、下から3分の2ほどの位置に蔵王堂が建てられていて、これもまた神仏習合の象徴となっている。蔵王堂には蔵王権現が祀られている。蔵王権現は神と仏の習合神である。

石段は399段あり、長さは約200メートルである。これは、伝統的な日本の測量単位では108間である（1間は約1.81メートル）。これは、仏教における涅槃に到達するために克服しなければならないとされる108個の煩惱に対応している。参拝者が本堂に向かって1間進むごとに、ひとつの煩惱が消え去る、とされている。

大晦日の日には観音万灯会が催され、その一環として階段に沿って何百個もの灯籠が付け足される。この光の回廊が厳粛な雰囲気を生み出すなか、参拝者たちは階段を上り、新年の祈りを捧げるのである。